The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	基本語化する外来語とその類義語 ： ヒトとヒトとの「トラブル」の場合
Author(s)	金, 愛蘭
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2008, 42, p. 19-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5209
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

基本語化する外来語とその類義語

──ヒトとヒトとの「トラブル」の場合──

金　　愛　蘭

1．外来語の「基本語化」現象

20 世紀後半における外来語の急激な増加は、日本語語彙に占める外来語の比重を全般的に高めたということだけでなく、一部の外来語が基本語彙の中に進出するという結果をも、もたらしている。ここで「基本語彙」とは、一定の言語使用領域において高頻度・広範囲に用いられる単語の集合であり、そのような基本語彙の要素である単語を「基本語」と言うならば、（それまで非基本語彙の位置にあった）単語が基本語彙の仲間入りをするという現象は、「基本語化」と呼ぶことができる。

さて、そうした外来語の多くは、「ホテル」「テレビ」「ビル」「エンジン」「スキー」などの具体名詞であるが、これらの基本語化は「生活の近代化」など言語外的な要因で説明することができる。一方、抽象的な意味をもつ外来語の中にも、「タイプ」「システム」「バランス」「ケース」「トラブル」などのように、主として（新聞や雑誌などの）文章を記述するために多用され、書きことばの基本語彙の仲間入りをしたと考えられるものがある。しかし、これらの外来語の表す意味は、生活の近代化に伴って新たに生じた意味とはいえないし、また、「アイデンティティー」や「セクハラ」などのように、それ以前に日本人に自覚・共感されていなかった概念でもない。このことは、これらの外来語が、この半世紀の間に、それまで使われていた和語や漢語の類義語に代わって基本語化した可能性を示唆するもの

であり、したがってまた、こうした抽象的な外来語の基本語化が、具体的な外来語と違って、言語外的な要因では説明しにくいことを示すものである。

このように、20 世紀後半における外来語の基本語化現象といっても、具体名詞の外来語と（主に書きことばで用いられる）ある程度抽象的な意味を表す外来語とでは、異なる接近法をとる必要がある。後者については、そもそもどのような外来語が基本語彙の中に進出したかを見出す必要があり、また、そうした基本語化がどのような過程を経て行われたのか、さらに、それはなぜ起こったのかということを、具体名詞の外来語とは違って、言語内的に明らかにしなければならない。そのためには、抽象的な基本外来語と目される単語の意味・用法とその発展過程とを、関連する（和語や漢語の）類義語との関係や、用いられる文章・談話の特徴なども視野に入れながら、具体的に記述する必要がある。従来の外来語研究では、主に具体名詞としての外来語の、その借用段階の様相に記述の重点が置かれたが、今後の、とくに現代語の外来語研究においては、「抽象的な意味を表す外来語の基本語化」の記述と理論化が重要な研究課題になるものと考えられる。

２．外来語「トラブル」の基本語化

上述したように、新聞や雑誌などの文章を記述するために多用され、基本語化したと考えられる抽象的な（意味を表す）外来語については、多くの場合、それ以前には類義の和語や漢語が用いられていたと考えられるにもかかわらず、なぜ、外来語がそれらをおしのけ、基本語化したのかを考えなければならない。

この問題に関して、拙稿（金 2006a）では、新聞文章における外来語「トラブル」の基本語化に注目し[1]、1960 年ごろから新聞に使われ始めた「トラブル」が、1980 年ごろまでにはその意味・用法を 3 種 6 類にまで拡大

させ、新聞で報道される機会の多い《深刻・決定的な危機的事態に至る可能性を持って顕在化した不正常な事態》という抽象的な意味を獲得することにより、それぞれの意味・内容を個別に表す類義語の上位語の位置に立って、それらの類義語が分担するより具体的ないし限定的な意味を「広く」「概略的に」表すことのできる、それまでの新聞語彙にはなかった基本語として成立したことを明らかにした上で、そうした基本語がそれまでの個別の類義語とは別に必要とされた背景に、20世紀後半における新聞文章の概略的な文体への変化があるとの見方を提示した。

ここで「トラブル」の３種６類の意味・用法とは、「トラブル」がどこに（何に）発生するかということと、発生した「トラブル」がどのような内容のものであるかということとを基準とした、以下のような分類である（用例は、『ＣＤ ──毎日新聞　2000データ集』からである。また事件当事者等の個人名はイニシャルに変更している）。

【ヒトとヒトとのトラブル】

〔デキゴトのトラブル〕（例）Ｒ容疑者が１週間前にホテルで従業員とトラブルを起こし「火をつける」と騒いだことがあり、出火直後に逃げて行く姿を住民が目撃した……

〔関係のトラブル〕（例）Ｍさんは交友関係でトラブルを抱えていたとみられることから、捜査本部は交友関係を中心に捜査していた。

【モノのトラブル】

〔機械のトラブル〕（例）列車の電気系統のトラブルが原因らしい。

〔身体のトラブル〕（例）春先はにきびなど肌のトラブルが起きやすい季節。

【モノゴトのトラブル】

〔運営・運用のトラブル〕（例）東京都立高校の入試が行われた22日、

Ｏ高校で、英語のリスニングテストが放送機器の故障で中止になるトラブルがあった。

〔事故・事件のトラブル〕（例）しかし、2000 個程度がすでに販売されていたにもかかわらず、食中毒などのトラブルは起きていなかった……

そして、この３種６類の意味・用法は、［表１］に示すように、そのすべてが初めからそろっていたわけではなく、20 世紀後半、とくに 1960 年から 80 年にかけて拡大したことがわかる。資料には、1950 ～ 2000 年の『毎日新聞縮刷版』から 10 年おきに各年２か月分（１月と７月）をとったその（東京版･大阪版を除く）全紙面の記事（1990 年･2000 年については『ＣＤ ──毎日新聞 '91 データ集』『同　2000 データ集』で代用した）を用いた。

［表１］「トラブル」の意味・用法別の使用量

		60 年		70 年		80 年		91 年		00 年	
ヒトとヒトとの	デキゴトの	17		43		46	1	50	6	41	5
	関係の			1		13		5		18	2
モノの	機械の			2		10	3	4	3	102	18
	身体の					4		5		3	
モノゴトの	運営・運用の			1		3		8		11	
	事故・事件の			2		12		15	2	23	2
合　　計		17		49		88+4		87+11		198+27	

（各年の左欄は自立用法、右欄は結合用法）

「トラブル」は、20 世紀後半の新聞文章の中で多義語化し、最終的には、これら３種６類の意味・用法を覆う、すなわち、《深刻・決定的な危機的事態に至る可能性を持って顕在化した不正常な事態》という抽象的な意味を表す、それまでの新聞語彙にはない[2]基本語として成立したと考えら

れる。そして、金（2006a）では、「トラブル」のこうした基本語化は、20世紀後半の新聞文章が、できごとを具体的に描写する文体から概略的に記述する文体へと変わってきたために、それぞれの意味・用法を個別に表す類義語を使用（して具体的に描写）するのではなく、いずれの意味・用法をも広く表す基本語を使用（して概略的に記述）することが必要とされたことによるものと考えたのである。

３．類義語の経年的調査の必要性

「トラブル」の基本語化について、上のような見方が妥当であるというためには、「トラブル」が、その意味・用法のそれぞれにおいて、実際に（和語や漢語の）類義語に代わって多用されるようになってきたことを、経年的な調査によって確かめる必要がある。しかし、金（2006a）では、「トラブル」の調査は行ったものの（表１）、個々の意味・用法ごとにどのような類義語があり、それら類義語群と「トラブル」の使用にどのような経年的推移が見られるかを調べることは、今後の課題として残された。

そこで、本稿では、［表１］と同じ資料の一部を使って、新聞における「トラブル」の類義語の使用状況を調査し、「トラブル」が基本語化する過程で、ほんとうに他の類義語の使用が減っているのかを確かめることにする。ただし、調査にあたっては、以下のような方針を採用した。

まず、「トラブル」の類義語は、あらかじめ（類義語辞典・外来語辞典等を参考に）類義語を決めてその使用例を探すのではなく、新聞文章を読みながら、「トラブル」を用いた表現に置き換えられそうな用例を探し、その表現の中で「トラブル」の類義語に相当する語を定めるという方法によって特定することにした[3)]。これは、今回の調査の場合、「トラブル」と類義語との間に、その意味が具体的か抽象的・概略的かという違いのあることが想定されるため、以下の（1a）～（1c）、（2a）～（2d）のように、

「トラブル」と同じ抽象度の類義語だけでなく、異なる抽象度の類義語（による表現）も考慮しなければならないと考えたからである。

（1a）安保改定の調印のため岸首相ら全権団は十六日夜、羽田から空路渡米するが、……当日は警視庁でも厳重な警戒網をしくので、学生と警官隊のトラブルは必至と見られる。（60 年 1 月 11 日、朝）

（1b）政府勧告の中労委あっせん乗出しで、仮処分執行期限の二十一日までたとえピケを解かなくても警官隊との衝突は起こらないと思うが、……（60 年 7 月 20 日、朝）

（1c）全学連では「ある程度の負傷者や検挙者はやむをえない」という強い態度でいるので、警官隊との激しいモミ合いが予想され、安保改定は全権団の飛行機が羽田空港を飛び立つまでもめそうだ。（60 年 1 月 11 日、朝）

（2a）調べでは、Ｉ容疑者は……「Ｈ船長は海へ突き落とした。Ｎさんについては、動転していてよく覚えていない」と供述。動機については「Ｈ船長に数百万円の借金の返済を迫られ、トラブルになった」と話しているという。（00 年 7 月 30 日、朝）

（2b）……船内食堂で、酒を飲んでいたＹ船長と機関長のＭ容疑者が、仕事の話をするうちにけんかとなり、Ｍ容疑者が船内階段上部から約一･七メートル下の床にＹ船長を突き落とした。（91 年 1 月 26 日、夕）

（2c）調べによるとＭ容疑者は七日午後七時ごろから自室でＳさんと酒を飲み始めたが、口論となり、八日午前二時ごろ、果物ナイフでＳさんの左耳後方を刺し、失血死させた疑い。（91 年 1 月 9 日、朝）

（2d）……酒に酔って帰宅していたＳさんと、無職の長男（１６）が口論。殴り合いになった。Ｓさんは頭を強打。近くの病院に収容されたが、

同十時すぎ、死亡した。(91 年 1 月 14 日、朝)

次に、こうした類義語の特定方法をとったこともあって、調査に多くの時間を要するため、用例を探す新聞文章の範囲を、［表１］の調査で用いた資料のうちの社会面に限るとともに、調査の対象を【ヒトとヒトとのトラブル】の類義語に限定することにした。社会面に限るのは、「トラブル」が最も多く使われる紙面であること、テキストタイプを統一し、各年の言語量をできるだけそろえること、などによる。また、【ヒトとヒトとのトラブル】に限るのは、［表１］に見るように、これが「トラブル」における最初の意味・用法であり、他の意味・用法に対しても基本的な位置にあると考えられるからである4)。

【ヒトとヒトとのトラブル】とは、人（個人、集団、組織など）の間に発生する「トラブル」であり、その内容と起こり方とによって、〔デキゴトのトラブル〕と〔関係のトラブル〕とに分けることができる。

〔デキゴトのトラブル〕は、〈個人や集団が、何らかの理由で、特定のとき・ところでひきおこす対立的な事態〉を意味する。対立する個人や集団は、以前から何らかの関係にある場合もあるが、その場で初めて出会った場合も多い。また、対立的な事態には、暴力や口論を伴う場合もあるが、そうでない場合もある。ただ、なんらかの〈デキゴト〉であることは共通しており、そのことを反映して、「トラブルになる／－が起きる・発生する／－を起こす／－が相次ぐ／－が多い」など、「トラブルの発生や多さ」を表す述語と共起する例が多く、また、「(誰々）と（の)」「(何々）をめぐって／めぐる」など、「トラブルの相手」や「理由」を表す修飾成分と共起したり、名詞句を構成したりする場合も多い。

一方、〔関係のトラブル〕は、〈個人や組織の間に〔デキゴトのトラブル〕を前提としてつくりあげられる対立的な関係〉を意味する。特定のとき・

ところで起こる〔デキゴトのトラブル〕をきっかけとしたり繰り返したりすることによって、二者の間に一定期間持続する対立的な関係が構成されるというもので、当然、二者が初対面ということはない。「～（誰々）と（の間に）」「～（何々）をめぐって／めぐる」などと共起するのは〔デキゴトのトラブル〕と同じだが、「トラブルがある／ない／－を抱える／－になっている」など、「トラブルの存在や有無」を表す述語と共起することが特徴的である。

ただし、今回の調査では、〔デキゴトのトラブル〕と〔関係のトラブル〕とを別個に扱う十分な用例数が得られなかったため、「トラブル」と類義語との関係を、上位の【ヒトとヒトとのトラブル】のレベルで検討することとした。したがって、今回得られた類義語には、〔デキゴトのトラブル〕のそれと〔関係のトラブル〕のそれとが混在していることになる。両者を区別しての検討は、今後の課題としたい。

４．類義語の使用量の変化

調査の結果、得られた類義語は［表２］のとおりである。上述したように、抽象度の高いものから低いものまで、また、〔デキゴトのトラブル〕と〔関係のトラブル〕とを区別せずに採集している。以下に、代表例とともに五十音順に記す。

あつれき

(3)「老人かけこみ寺制度」は、三世代同居家庭などで、最近、世代間のあつれきが目立っているため“弱者”となりがちな老世代に対して、ケースワーカーなどが相談に乗る制度。(80 年 1 月 17 日、朝)

争い／争う

(4) 調べによるとＭちゃんは先妻の子で、……子どものことでいつも争

［表２］「トラブル」の類義語の使用量（延べ語数）

類義語	50 年	60 年	70 年	80 年	91 年	00 年
あつれき				1		
争い／争う		6	1	2	2	4
暗闘	1			1		
言い争い／言い争う			2			
いがみあい			2			
いさかい	1		2		2	2
いざこざ	2	1	1			
内ゲバ			4	3		
内輪ゲンカ			1	1		
内輪もめ			1			1
葛藤	2					
口ゲバ			1			
激突（する）		6				
けんか（する）	1	29	27	8	16	16
口論（する）	2	8	9	12	20	20
こぜりあい	1	8	5		2	
ごたごた	1	3	1	1	4	2
衝突（する）		13	3			
つかみあい			1			
内紛	8			9	5	1
殴り合い			3	1	3	
ひともめ	1	1	1			
ひと悶着			1			
不和	1	2		1		
紛争	6	2				
摩擦		1	1			
もつれ／もつれる	3	1	8	4	4	2
もみ合い／もみ合う		5		1	5	
もめごと						1
もめる		3	2	1	6	5
乱闘	4	6	8		1	

いが絶えなかった。（60 年 7 月 16 日、朝）

暗闘

（5）一方Ｋさんは W博士の研究室にもしばしば泊まり込み同博士との醜聞がうわさになるなど、Ｋさん、博士、Ｈとの醜い三角関係の暗闘が続けられるようになった。（50 年 1 月 16 日）

言い争い／言い争う

（6）……で酒を飲んでいたが、居合わせた客のＡさんと言争いとなった。これをみた近くの中華料理店の店主、Ｂさんが仲裁に入ると……（70 年 1 月 25 日、朝）

いがみあい

（7）スト支援の沖縄県労協幹部に集団暴行を加えるという県民どうしのいがみ合いも起こり、……（70 年 1 月 20 日、夕）

いさかい

（8）愛宕署の調べによるとＳは生来怠け者のうえ酒癖悪く、昨年からＫさんとの間に別れ話が持上がり別居していたが時々訪れては無心するので、そのたびに家人とのいさかいが絶えなかった。（50 年 7 月 8 日）

いざこざ

（9）……同校は校長派と教頭派に分れ派閥的なイザコザが絶えずあったらしく『この内紛が遂に傷害ざたにまで発展したのではないか』と同捜査部では見ている。（50 年 1 月 25 日）

内ゲバ

（10）種痘ワクチンをかかりつけの家庭医で受けるべきか、否か－－をめぐって、厚生省と東京都医師会が“内ゲバ”をはじめた。（70 年 7 月 2 日、朝）

内輪ゲンカ

（11）この（厚生省と東京都医師会の）内輪ゲンカ、母親たちを心配さ

せている。(70年7月2日、朝)

内輪もめ

(12) 陣営幹部は「保守系にも無党派層が多い。自民の内輪もめに嫌気がさした有権者に当方の政策を訴えたい」と意気込む。(00年1月23日、朝)

葛藤

(13) ……関係者の話を総合すると容疑者Hを中心としたT大K分院内の葛藤は次のようである。(50年1月16日)

口ゲバ

(14) また家永反対派の学生たちは裁判が終わっても支援派と口ゲバ。(70年7月17日、夕)

激突(する)

(15) これで明二十一日を期限とするホッパー周辺の仮処分決行をめぐり労使の激突は避けられない形となった。(60年7月20日、夕)

けんか(する)

(16) Kは昨年九月十日夜、同市旭町の飲食店で仲間のTさん(十八)とケンカ、ナイフで同君の胸と腹を刺し、死亡させたというもの。(60年7月1日、朝)

口論(する)

(17) 同署の調べでは、Hは同駅に遊びに来て、Nさんに「仕事せんか」と声をかけられて口論、NさんがHの顔をなぐった。(80年1月17日、朝)

こぜりあい

(18) 全軍労スト第一日の十九日は米軍側が完全武装で対決に出たため小ぜり合い、逮捕者が続出、緊迫と不安のうちに第二夜にはいった。(70年1月20日、夕)

ごたごた

（19）最近、全国各地の寺院墓地で「埋葬させろ」「させない」などのゴタゴタがふえ、なかには墓地の移転や改葬をめぐって裁判ざたさえ起こっている。（60 年 1 月 30 日、朝）

衝突（する）

（20）昨年十一月十三日の佐藤首相訪米阻止闘争のさい大阪市北区扇町公園南側路上でデモ隊と警官隊が衝突、岡山大生Ｋ君（二一）が負傷、翌日死亡した事件で、……（70 年 1 月 27 日、朝）

つかみあい

（21）機動隊約五十人が防石マスクなど完全武装で出動、全軍労組合員百五十人と抗議団のつかみ合いに割ってはいるという混乱ぶり。（70 年 1 月 21 日、朝）

内紛

（22）……また現在教授、助教授、講師の新任異動の問題もなく、W助教授が留学するという事実も全くないところから内紛の種となるようなものはないといわれている（50 年 1 月 14 日）

殴り合い

（23）三十歳ぐらいの男が割り込んできたため注意したところ口論となり、殴り合いになった。（80 年 1 月 16 日、朝）

ひともめ

（24）バスでピケを突破しようとしたが、これを阻止したピケ隊との間にひともめ。（70 年 1 月 8 日、夕）

ひと悶着

（25）【見出し】傍聴めぐり一もん着（70 年 7 月 3 日、朝）

不和

（26）Mはソ連引揚者で共産主義者であるため家族との不和がたえず最

近両親から勘当するといわれたのに憤慨しての凶行らしい。（50年7月17日）

紛争

（27）二人先生でもめているK高の紛争の解決をはかるため……（60年1月22日、朝）

摩擦

（28）沖縄では米兵犯罪の多発に伴って住民と米兵の摩擦が目立っているが、コザ署ではこの殺人事件が沖縄県民と関係していることも考えられるとしている。（70年7月4日、夕）

もつれ／もつれる

（29）九日朝、東京と大阪で親子心中が相次いだ。……どちらも夫婦仲のもつれが原因だった。（70年7月9日、夕）

もみ合い／もみ合う

（30）……大阪発那覇行き日本航空９１９便……が離陸のため滑走路に向かう途中、乗客の男が「降ろしてくれ」と叫んで操縦席ドアの前で、乗員ら二人ともみ合いになった。（91年1月22日、朝）

もめごと

（31）校長というあだ名は震災後、避難した鷹取中でつけられた。よく住民のもめごとの仲裁役を買って出たからだ。（00年1月6日、朝）

もめる

（32）しかし定員の関係ではいれなかった約三十人の学生たちが、法廷外の廊下で警備員ともめ、一時は機動隊が出動する騒ぎとなった。（70年7月3日、朝）

乱闘

（33）六人が同大野球部員五人にいんねんをつけて乱闘となり、Kは同市島、無職、B少年（十五）をバットでなぐり左腕骨折二ヶ月の重傷

を負わせた疑い。（60 年 7 月 5 日、朝）

5.「トラブル」の基本語化と類義語

本稿では、「トラブル」が基本語化する際、ほんとうに「トラブル」が（和語や漢語の）類義語に代わって多用され、類義語の使用が減っていくのか、ということを確かめるため、1950 ～ 2000 年の『毎日新聞』の社会面記事を資料に、【ヒトとヒトとのトラブル】に限ってその類義語の使用状況を調査し、［表 2］のような結果を得た。ただし、この調査は、『毎日新聞』のみを 10 年おきに各年 2 か月分調べただけであり、もとより、個々の類義語の、20 世紀後半の新聞における使用の変化を知るには少なすぎる。したがって、以下に述べることは、紙幅の都合で断定的な表現をしているが、基本的に、おおよその傾向を推測するにとどまる。

まず、［表 2］の類義語全体の使用量（延べ語数）と、同じ資料から得た「トラブル」のそれとを比較すると、［表 3］のようになる。

［表 3］「トラブル」と類義語の使用量（延べ語数）

	50 年	60 年	70 年	80 年	91 年	00 年
「トラブル」（%）	0 (0.0)	6 (5.9)	19 (18.3)	15 (24.6)	12 (14.6)	31 (36.5)
類義語全体（%）	34 (100.0)	95 (94.1)	85 (81.7)	46 (75.4)	70 (85.4)	54 (63.5)
類義語の異なり	14	16	22	14	13	10

年によって社会面のページ数や 1 ページあたりの文字数が異なるため、各年の使用量をそのまま比較することはできないが、類義語全体と「トラブル」との使用の割合（［表 3］のカッコ内の数字）を見ると、1991 年で「トラブル」の割合が少し落ち込むのを別にすれば、全体として、類義語全体の使用が減って、「トラブル」の使用が増えるという傾向が明瞭に読み取

れる。類義語の異なり語数も、各年の言語量が異なるので参考程度にとどまるが、70年をピークに減っている。これらの結果は、新聞の社会面記事で、（ヒトとヒトとの）「トラブル」の使用が増え、逆に、その類義語の使用が減っていることを示すもので、金（2006a）の見方に合致する。

次に、［表２］の個々の類義語とその使用の変化に注目すると、以下のような傾向が読み取れる。

まず、「トラブル」よりも抽象度の低い、【ヒトとヒトとのトラブル】の内容をより具体的に表す類義語の多くは、その使用を減らしている。「言い争い／言い争う」「口ゲバ」「激突（する）」「こぜりあい」「つかみあい」「殴り合い」「乱闘」などである。これらの減少は、上述の全体的な傾向に対応するもので、金（2006a）の見方に合致するものである。

一方、「トラブル」と同じように、【ヒトとヒトとのトラブル】の内容を概略的に表す類義語の使用には、二つの傾向が見られる。一つは、「いざこざ」「葛藤」「ひともめ」「ひと悶着」「不和」「紛争」「摩擦」など、その使用を減らしているものであり、いま一つは、「争い／争う」「いさかい」「ごたごた」「もつれ／もつれる」「もめる」など、2000年まで使われ続けているものである。ただし、後者についても、その使用は「トラブル」よりも少なくなってきている。なお、「内紛」「内輪ゲンカ」「内輪もめ」「内ゲバ」は、「ある集団・組織の中での」という限定があるもので、これらの使用も減少か停滞の傾向にある。

これら概略的な類義語は、新聞の文体が具体的な描写から概略的な記述に変化しつつあるとすれば、むしろその使用を増やしていいはずであるが、そうはなっていない。それは、金（2006a）でも示したように、これらの類義語が、【ヒトとヒトとのトラブル】を表すのみで、３種６類の意味・用法をもつ「トラブル」よりも意味範囲が狭く、より多くの意味内容をより少ない基本語で表そうとする、もう一つの概略化傾向によって、「トラ

ブル」の使用に押されているのではないかと考えられる。

以上のように、今回の調査で得られた類義語の多くは、「トラブル」の増加に反比例するようにその使用を減らすか、停滞させている。これらの傾向は、金（2006a）の見方に合致する結果であるといえる。ただし、「けんか（する）」と「口論（する）」とは、他の類義語と違って、その使用を減らしていない。これについては、今のところ、次のように考えたい。

「けんか（する）」「口論（する）」は、（34）のように、具体的な描写の中で使われることが多い。

（34）同署や同校によると、先月５日午後０時 50 分ごろ、同校グラウンドで、野球をしようとした普通科の生徒 10 人とサッカーボールで遊んでいた自動車科の生徒 19 人が口論となり、うち普通科の６人と自動車科の 12 人がけんかとなった。普通科の１人が金属バットで自動車科の３人の頭や腕を殴り、自動車科の１人も木製バットで普通科の１人を殴った。金属バットで殴られた生徒のうち１人は脳内出血で３週間入院、他にも８人が打撲などを負った。（00 年７月 16 日、朝）

新聞文章が概略化の傾向にあるとはいっても、具体的な描写がまったくなくなってしまうわけではない。これら２語は、「トラブル」が多用される概略的な記述の中ではなく、それとは別に必要とされる具体的な描写の中で多用されているのではないか。しかし、新聞の概略化傾向の中では、具体的な描写もまた概略化するわけで、先に見たように、「言い争い」等の具体的な類義語の多くは使われなくなり、これら２語に収束するような傾向があるのではないか。とくに、「言い争い」等より抽象度が高く、かつ、「トラブル」よりは具体性の高い「けんか（する）」は、そうした要請に応えるのに好適な単語ではないかと考えられる。

注

1）同様の問題を「ケース」について調査したものに、金（2006b）がある。

2）「トラブル」に似た単語に、漢語の「問題」がある。「問題」も、《深刻・決定的な危機的事態に至る可能性を持つ不正常さ》を表すという点では「トラブル」と共通するが、「トラブル」があくまで《顕在化した事態としての不正常さ》を表すのに対して、「問題」は《内在的な状態としての不正常さ》を表すことに重点がある。金（2006a）参照。

3）ある語と類義語の関係にあるものを、あらかじめ定めることの難しさを論じたものに、小野（2006）がある。

4）「トラブル」の意味・用法間の派生関係については、金（2006a）参照。

【引用文献】

小野正弘（2006）「ある語が他と類義語にあると言える根拠は何か」『国文学解釈と教材の研究』51-4（学燈社）、pp.42-45

金　愛蘭（2006a）「外来語『トラブル』の基本語化 ──20 世紀後半の新聞記事における──」『日本語の研究』2-2（日本語学会）、pp.18-33

金　愛蘭（2006b）「新聞の基本外来語『ケース』の意味･用法 ──類義語『事例』『例』『場合』との比較──」『計量国語学』25-5（計量国語学会）、pp.215-236

【付記】

『ＣＤ ──毎日新聞データ集』は、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座が毎日新聞社と交わした利用許諾契約・覚書にもとづき使用した。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

The Loanword Shifting to a Basic Word and its Synonyms: In case of "*toraburu*" in Japanese Newspaper Vocabulary

Eran KIM

The loanword "*toraburu*" originating from the English "trouble" began to be used in newspapers from around 1960, and by around 1980 its meaning and usage expanded to three major types and six subtypes. As a result, it developed into a word which can express "widely", "approximately" an ≪abnormal situation brought to prominence, possibly resulting in a serious and decisive critical situation≫ of the type often reported in newspapers. A change to a more "generalized" style in Japanese newspaper texts in the second half of the 20th century made "*toraburu*" as such a "convenient" basic word instead of previous synonyms which could express only an individual narrow meaning.

If this conclusion is correct, the use of the synonyms is expected to decrease opposite to the increase of "*toraburu*". To prove this expectation, this paper investigates the frequency of "*toraburu*" and its synonyms, limited to the meaning of <trouble with someone>, in the local news pages of The Mainichi Daily News in the second half of the 20th century.

As a result of the investigation, the following was clarified.

a) The total amount of synonyms usage has obviously decreased in inverse proportion to the increase of the use of "*toraburu*".

b) Many synonyms expressing the content of <trouble with someone> more "concretely" have obviously decreased.

c) The synonyms expressing the content of <trouble with someone> more "generally" like "*toraburu*" show obvious decrease or continue to be used less often than "*toraburu*".

These results indicate that Japanese newspaper texts are changing to a more "generalized" style and need a basic word to express a wider meaning.

キーワード：外来語，「トラブル」，基本語彙，類義語，新聞の文体